



児童福祉研究 第6号

いっしょに子育て



学校法人

和泉短期大学

1	赤ちゃんと歌おう！生きる力と繋がりを育む音楽あそび	
	教授 山本美貴子	1

2	愛されて育つ	
	准教授 和寺悠佳	11

3	社会的養護下で暮らす子どもの養育	
	ー子どもの気持ちへの理解ー	
	准教授 中安恆太	21

4	後になって分かること	
	ー東日本大震災・原発事故から12年後のスタディーツアーー	
	専任講師 吉田久仁子	27

5	子どもに寄り添う音楽	
	ー音楽に初めて出逢う我が子との関わりで気付いたことー	
	助教 前島麻衣	35

6	キャンパスだより	
	准教授 中野陽子	41

赤ちゃんとおう！
生きる力と繋がりをもむ音楽あそび



教授
山本美貴子
Mikiko Yamamoto

子ども達と一緒に歌うとは？

「幼稚園や保育園での音楽の活動」というと、子ども達が歌を歌う姿をイメージされる方が多いと思います。季節や生活の歌や振りを伴うあそび歌は、保育園や幼稚園で子ども達に大人気！明治の初め日本に幼稚園が始まった時代に「唱歌」「お遊戯」などの名称で親しまれた頃から、ずっと途絶えることなく、毎日のように行われています。子どもがリズムに合わせて首や手足を動かしながら歌う姿は本当に愛らしく、共に過ごす私達が「音楽っていいなあ」と実感する幸せな時間を与えてくれます。

音楽大学教育音楽学科幼児教育専攻で幼稚園教諭免許を取得した私は、子ども達と音楽することを楽しみに幼稚園教諭になり、クラスの子ども達と毎日一緒にたくさん歌を歌ったり踊ったり、音楽を楽しむことで幸せな時間を共有しました。と同時に、子どもを主体とした最新の保育理論「環境を通して行う教育」において、一人ひとりの個性や想像力・創造力を育む音楽活動の実践に悩み研究に進む動機ともなりました。

その頃も今も、子育て中のご家族から、「最近テレビや動画の歌に合わせて一緒に声を出してます」「歌が聴こえてくると楽しそうに体を動かしてリズムをとっています」「園で歌った歌を車の中で歌ってくれます」などの嬉しいお話や、「私は音痴なので曲を流して聞かせてもいいでしょうか」「一緒に歌いたいので家で歌える歌を教えてください」などのお

声に、「ぜひ一緒に歌って下さい」とご紹介しています。

本紙面であそび歌の曲そのもの（メロディー・振りなど）を詳しくお伝えするのは難しいですが、幾つかタイトルをご紹介しつつ、「赤ちゃん学」「乳幼児の音楽教育研究」の成果や、最新の幼稚園教育要領・保育所保育指針に求められている内容を交えて、次の2つのテーマに沿って「生きる力と繋がりを育む音楽あそび」についてお話したいと思います。

- 1) 音楽や保育の専門家のリードがなくても、ご家庭・車の中・外出先などのチョットした時間に、赤ちゃんやゆったりのんびり歌えるあそび歌などの曲例を幾つかご紹介します
- 2) 母国語と結びついた歌による音楽活動（音楽的なコミュニケーション）は、音楽教育に留まらず、以下の3ステップを通して子どもの生きる力を育みます。
 - ① 大人と子ども・子ども同士の愛情を豊かに伝える最適なコミュニケーションツールとして
 - ② 互いの模倣・真似っこ体験が音楽性（感性）やその子らしい表現力を育てる優れた教育方法である。
 - ③ 相手と呼吸を合わせる音楽的な関りが他者との繋がりを豊かに、生きる力を育む。

1) 乳幼児期に親しい大人と楽しむ「あそび歌」の力

少人数で或いはクラスで歌ったり言葉を唱えたりしながら、リズムカルで面白い・可愛い振りを楽しむあそび歌には「まあるいたまごが」「げんこつやまのたぬきさん」「いっぽんぱし」「トントントントンひげじいさん」などがあります。また、少し大きくなって一対一で向かい合い手と手を打ち合わせて遊ぶ「手合わせうた」には、「おちゃらか」「おてらの和尚さん」「じゅうごやさんのもちつき」「アルプス一万尺」などがあります。きっとご家族の皆様も歌った思い出がある親しんだ曲が多いのではないのでしょうか？

こうしたあそび歌の多くは口伝えで口頭伝承されたわらべうた*、もしくは現代に作られていてもわらべうた旋律*のシンプルなメロディーが多く、素朴で覚えやすく繰り返し言葉やオノマトペが楽しい歌詞と、リズムにのった単純で可愛い或いはユーモラスな振りは飽きられることなく、現代の子どもも惹きつける伝統的なあそび歌です。

もちろん「むすんでひらいて」のように、西洋音楽の旋律に日本語の詩を載せたあそび歌もたくさんありますが、乳幼児の音楽行動観察研究により、子どもが夢中で遊ぶうちに日本語の抑揚に自然な旋律で歌う姿が多く報告されています。

* わらべうた旋律…日本語の話し言葉の音楽的特徴に基づき、抑揚を少し大きくした2音～4音の旋律

0歳～の赤ちゃん遊ぶ場合、「いないいないば～」 「ピポパポお電話しましょ」 「お座りなさい椅子ですよ」などのいわゆるスキンシップを楽しむあやし歌が楽しめますが、たとえば「さかながはねた～ピューン あたまにくっついた帽子」 「あたま かた ひざ ポン」 など園で幼児が歌うあそび歌も、遊び方をアレンジして十分にコミュニケーションしながら音楽することができます。大人が歌いながら、歌詞に合わせてコロんと寝かせた赤ちゃんに触れてあげたり、「に一ほんばしこーちょこちょ」などの手合わせ歌に合わせて、身体のあちこちに触れたりくすぐったりして遊びましょう。

あやし歌・あそび歌を大人が歌い掛け、たっぷり触れ合う経験は豊かな愛情を伝え、人と繋がる力が育まれます。

2) 母国語と結びついた歌による 音楽的コミュニケーションが育む「生きる力」

こうした母国語と結びついたわらべ歌・あやし歌・あそび歌などによる親しい人との音楽活動（音楽的なコミュニケーション）は、たくさんの歌を覚えたり、音程正しく歌えるというような音楽スキルの教育に留まらず、次の3つのステップなどを通して子どもの「生きる力」を育むことが明らかになっています。

①大人と子ども・子ども同士の愛情を豊かに伝えるコミュニケーションツールとして

子どもが遊ぶ姿・音楽する姿をじっくりと観察する研究が進むにつれ、歌や音・リズム・動きで誰かと一緒にやりとりする・息を合わせる音楽行動は人の心に強く作用して、人と人の心を合わせる・愛情を確認し合う力をもつ、それゆえに子どもを強く惹きつけるということが明らかになりました。

たとえば、両親や親しい人と一緒に、息を合わせて触れ合う、視線を合わせて歌う、リズムを感じて動く・揺れるなどのわらべ歌・あやし歌・手あそび歌による音楽的コミュニケーションは、言葉やスキンシップと同じ様に、お互いに愛情を伝え合い結びつきを強める最適なコミュニケーションツールです。

②互いの模倣・真似っこ体験が音楽性（感性）やその子らしい表現力を育てる優れた教育方法である。

日常の中で親しい大好きな大人の様々な表現（動き・声・言葉・表情などなど）に注目し模倣して次第に自分の表現として用いるようになります。歌による音楽的なコミュニケーションは子どもにとって愛情を感じ様々な要素を含み魅力的で楽しみながらくり返し学ぶ最適な機会となります。

ここで大切なのは、飽きるかと思ってついとっかえひっかえ新しい歌を用いず、「その子のお気に入り」を繰り返し繰

り返し楽しむことです。声と声、視線と視線、身体と身体、息と息のタイミングを合わせ「音楽的なやりとり」をたっぷり味わってください。心を通わせながら、次第に大人のタイミングを読んで次に起こることを予測できるようになると繋がりが確かになります。また表現をまねっこすることでその子らしい表現が確立されていきます。

やりとりと模倣により母国語を獲得するのと全く同じ道筋の中で、息を合わせ言葉をリズムカルにまとめる音楽的な能力を獲得しています。

③相手と呼吸を合わせる音楽的な関りが他者との繋がりを豊かに、生きる力を育む。

例えば「♪チヨチチアワワ・・・いないいないバ〜！」というような古くから途切れることなく親しまれているあやし歌は、②でご紹介したように繰り返しやりとりを楽しんでいると、赤ちゃんは次第に自分をあやしてくれる、愛してくれる大好きな人の息を読み、最後のバー！の部分で相手と呼吸を合わせようとするのが明らかになっています。赤ちゃん自身が自分から「音楽的なやりとり」を楽しむ力を発揮するのです。

赤ちゃんは単に受動的・依存的な存在ではなく、愛情を感じたっぴりとコミュニケーションを持ち、やりとりの中で育つ内に、自分からも能動的に関わる力を獲得します。そうした行動を愛着行動といいます。誕生後直ぐから 準備段階

に入り、生後12週位から本格的に発達することも明らかになっています。

つまり、乳幼児にとってのあやし歌・あそび歌でのやりとり・音楽的なコミュニケーションは、単に趣味や娯楽ではなく、他者との繋がりをより豊かに結び、自分らしさを確立し、生きる力を獲得する上で欠かせないものです。

さらに、赤ちゃんに接する養育者が、愛情を伝え・コミュニケーションする行動（安心する音や声・あやし言葉・呼び掛け・揺れるリズム・トントンなど）を行うことで、この時期の音楽との出会いが「愛情あふれる楽しい経験」「幸せなやりとりの記憶」（快の経験）から始まっていることが大きな役割を果たしています。成長後も音楽を聴くとウキウキしたり、人が生涯にわたり音楽を愛する素地に影響を与えていると考えられています。

「わらべ歌・あそび歌」は、これまで保育実践の中で、活動の導入・合間のお楽しみや食前などのお決まりの活動として位置づけられているきらいがありましたが、今回は、子どもの生きる力を育くむ音楽的なコミュニケーションを担う素材として、あらためて評価が高まっている魅力や重要性をご紹介します。保育者の実践研修でも熱心に学んでいただいています。ぜひご家庭でも赤ちゃんに話し掛けるように歌の一部分を歌い掛けたり、歌うように名前を呼んでみたり、歌いやすく・遊びやすく自由に言葉やメロディーをアレンジして、やりとりを楽しんでみてください。

これらは「母国語の話し言葉と深く結びついた音楽」として日本語を話せる大人なら誰でも知らない内に身につけている音楽で、特に専門知識や理論や、「音楽は苦手」「楽譜が読めない」と構える必要ありません。

生活のふとした場面で、親しみのある身近な大人と、話そうように歌ったり、歌うように話したり繰り返し楽しむ経験が、子どもにとって大きな育ちをもたらします。様々な場面で、子どもの魅力的な表現に出逢えると思います。



K.H.

児童福祉学科 教授

山本美貴子

専門分野 音楽教育学、乳幼児表現教育、保育者養成

略歴 国立音楽大学音楽学部教育音楽学科幼児教育専攻
(芸術学士)

幼稚園教諭第1種免許取得

(学) 立教女学院短期大学附属愛児研究所天使園
教諭13年

国立音楽大学大学院 音楽研究科音楽教育学専攻
修士課程修了 修士(音楽)

国立音楽大学音楽学部音楽教育学科幼児教育専攻
非常勤講師

福島学院短期大学専任講師

白百合女子大学児童文化学科・白百合女子大学生
涯学習資格センター非常勤講師

和泉短期大学非常勤講師・専任講師・准教授を経て教授。

担当科目 保育内容「表現」、保育の総合的指導法「音楽表現」、保育実習・教育実習など

環境を通して行う表現教育、乳幼児の創造性・想像性を育む音楽活動などについて、自由な遊びや生活の場面での音楽教育にかんする実践力のある保育者の養成を志し、現職保育者のキャリアアップ・社会人のキャリアチェンジに資する研修にも取り組んでいます

愛されて育つ



准教授
和寺悠佳
Yuka Wadera

キリスト教と子供たち

キリスト教は、子供たちと関わることを大切にしてきました。多くのキリスト教会は、教会学校を持っています。教会学校では、子供たちを中心とした礼拝が行なわれ、さらに、様々な活動を通して、子供たちに聖書の教えを伝えています。また、幼稚園や保育園とのつながりのあるキリスト教会も多くあります。教会の牧師が、幼稚園の園長を務めていることも珍しくありません。キリスト教と子供たちとは、深いつながりがあります。子供たちが幼いころに、キリスト教に触れることには大きな意味があります。

自分らしく生きる

キリスト教が伝えていること——それは、神様と他の人たちと共に生きる、一緒に生きる、ということです。私たちが、神様と他の人たちと共に生きる、それを神様が願っている、ということです。

私たちは、いま生きています。それでは、私たちの命は、どうやって手に入れたものでしょうか。自分で決めて、努力して、誕生日に生まれたものではありません。自分の命を自分で手に入れた人はいません。自分の命を自分で作り出した人はいません。私たちの命は、自分以外の誰かによって、私たちに与えられたものです。そもそも、「生まれる」という言

い方自体が、受け身の言い方です。命は私たちが作りだしたものではなく、私たちに与えられたもの。聖書は、神様が、私たちに命を与えてくださった、と語っています。神様は、私たちに命を与えてくださり、その私たちを大切に思い、深く深く愛してくださっています。

神様に命を与えていただいた私たちは、その神様と共に生きることが相応しい生き方です。神様に命を与えてもらった人間同士が、仲良く共に生きることが、私たちに相応しい生き方です。神様と、他の人たちと、共に生きるという生き方、それが私たちの生き方、人間らしい生き方です。そのような生き方をするとき、私たちは本当に生きていると言えます。

けれども、神様と共に生きること、人間同士が共に生きすることは、私たちにはなかなかできません。私たちは、神様以外のものが大切になったり、神様以外のものが自分を支えてくれると思ったりしてしまいます。人間同士の関係も、仲良くできるときもありますが、対立したり、相手を憎らしく思ったりしてしまいます。このようになると、神様と私たちとの関係や、私たちと他の人との関係は、壊れてしまっていると言うしかないでしょう。神様との関係、他の人たちとの関係が壊れてしまっていること、それを聖書、キリスト教では「罪」と言います。犯罪のことではありません。神様や他の人たちとの関係が壊れてしまって、誰かと共に生きることができなくなってしまって、人間らしい生き方ができなくなってしまっている、そのことを「罪」と言います。

私たちは私たちにらしく生きることができていません。私たちに命を与えてくださった神様は、そのことをとても悲しまれました。そして、私たちが、私たちにらしく生きること、人間らしく生きることができるようにしたい、と思ってくださいました。罪を犯してしまうと、罰を受けなければなりません。私たちの罪、人間らしく生きられていないという罪は、罰を受ければ赦してもらえます。でも、神様は、神様にとってとても大切な人間たちが、罰を受けるということを嫌だと思いました。人間を罰することは出来ない、人間が罰を受けるのを見ていられないと思ってくださいました。だから、神様が私たちの身代わりとなって罰を受けようと決めてくださいました。神様が人間になろうと決めてくださいました。こうして、人間になってくださったのがイエス・キリストです。イエス・キリストが人間として生まれてくださった日がクリスマスなのです。

キリスト教と言えば、十字架をイメージするという方もいらっしゃるでしょう。十字架はキリスト教のシンボルのように用いられていますが、イエス・キリストはこの十字架にかかってくださいました。実は、十字架とは刑罰の道具です。十字架とはイエス・キリストが私たちの身代わりになって罰を受けてくださったことを意味します。イエス・キリストが、私たちに代わって十字架にかかってくださって罰を受けてくださったので、私たちの罪は赦されました。人間らしい生き方ができないという罪が赦された結果、私たちは人間らしく、私たちにらしく生きることができるようになりました。

神様と他の人たちと共に生きる者となりました。

子供たちは愛されている

キリスト教の土台となるのは、聖書です。聖書は、神様がどのような方であるのかを私たちに教えてくれます。聖書から、神様が私たち人間のことを愛し、大切にしてくださる方であることが分かります。神様が、私たち人間の身代わりになって十字架にかかってくださるほどに、人間を愛してくださっていることが分かります。ですから、聖書にはたくさんの人たちが登場します。聖書の登場人物たちは、神様に愛され、神様との関わりの中を歩んでいます。その中には、子供たちもいます。聖書にこんなお話があります。

イエスに触れていただくために、人々は乳飲み子までも連れてきた。弟子たちは、これを見て叱った。しかし、イエスは乳飲み子たちを呼び寄せて言われた。「子供たちをわたしのところへ来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである」（ルカによる福音書18章15～16節）

この当時、子供たちは、社会の一員とは認められていませんでした。自立した生活のできない子供たち、様々なハンディキャップを持っている人たちは、一人前の人間ではないと低く見られていました。当時の人々は、そのような人たちと

ほとんど関わろうとはしませんでした。つまり子供たちは、社会の中に居場所がありませんでした。だから、イエス・キリストのもとに子供たちを連れてきた親たちは、叱られてしまいました。

しかし、イエス・キリストは、そのような子供たち、社会の中に居場所がなかった人たちと積極的に関わってくださいました。どんな人であっても、神様に愛されている存在だと伝えるために、どんな人とも関わってくださいました。障がいや病気で苦しむ人たちを癒し、食事を共にしてくださいました。子供たちをご自分のもとへ呼び寄せてくださいました。そして、子供たちをさして、「神の国はこのような者たちのものである」と言われました。神の国とは、神様に愛されている者たちがいるところです。神様の愛で満たされているところです。当時の社会の中では、子供たちは尊重されていなかった。けれども、人々がどう思おうとも、子供たちのことを神様は愛している。子供たち一人ひとり、神様にとって大切な存在。イエス・キリストは、そのことを伝えてくださいました。

イエス・キリストは、私たちの身代わりになって十字架にかかってくださった方です。私たちが人間らしく生きられるようにするために十字架にかかってくださった方です。神様は、どんな人も愛しておられます。どんな人も、その人らしく生きて欲しいと願っています。社会の中で居場所がない人がいる、その人もその人らしく生きてほしい、その人を受け入れて共に生きて欲しい、子供たちと共に歩んでほしい、そ

れが神様の願いです。私たちが、どんな人とも共に生きられるようにするために、イエス・キリストが十字架にかかってくださったのです。神様は、私たちに私たちらしく生きることを願い、私たちがそのように生きられるようにしてくださいました。ですから、愛するとは、人がその人らしく生きることを願い、その人がその人らしく生きていることを受け入れることだ、と言えるでしょう。

愛されているから自分と誰かを愛する人になる

どんな人も神様に愛されている、あなたは神様に愛されている。神様に愛されている者同士が、共に生きていく。人間とはそういうもの。このことを、幼い頃に知るのはとても大切なことでしょう。

私たちは、色々なことを教えられて、色々なことができるようになります。愛も同じです。愛は教えてもらわないと分かりません。誰かに愛されて、愛を知ります。愛されているから、自分自身が大切に尊い存在であると分かります。愛されているから、自分と他者を愛することができるようになります。愛されて育った子供、自分がどれだけ愛されているかを知っている子供は、自分を大切にし、さらに、他の人たちを大切にし、愛することができるようになります。自分は神様に愛されている、愛されて嬉しいから自分も他の人たちを愛する、そのような子供へと成長していきます。誰かと共に生きるという、人間らしい生き方をする者になっていきま

す。子供たちには、愛されるという経験が必要です。

神様は、どんな子供たちも無条件で愛してくださっています。神様の愛は、私たちのために神様ご自分が身代わりになってくださるほどの愛です。人間にはとてもできないような、考えられないような愛です。そのような愛で私たちは愛されています。あなたは愛されている、神様の大きな大きな愛で愛されている——子供たちに、このことを伝えていきたいものですね。

*本稿では、引用した聖書の表記にあわせて、「子供」と表記しています。

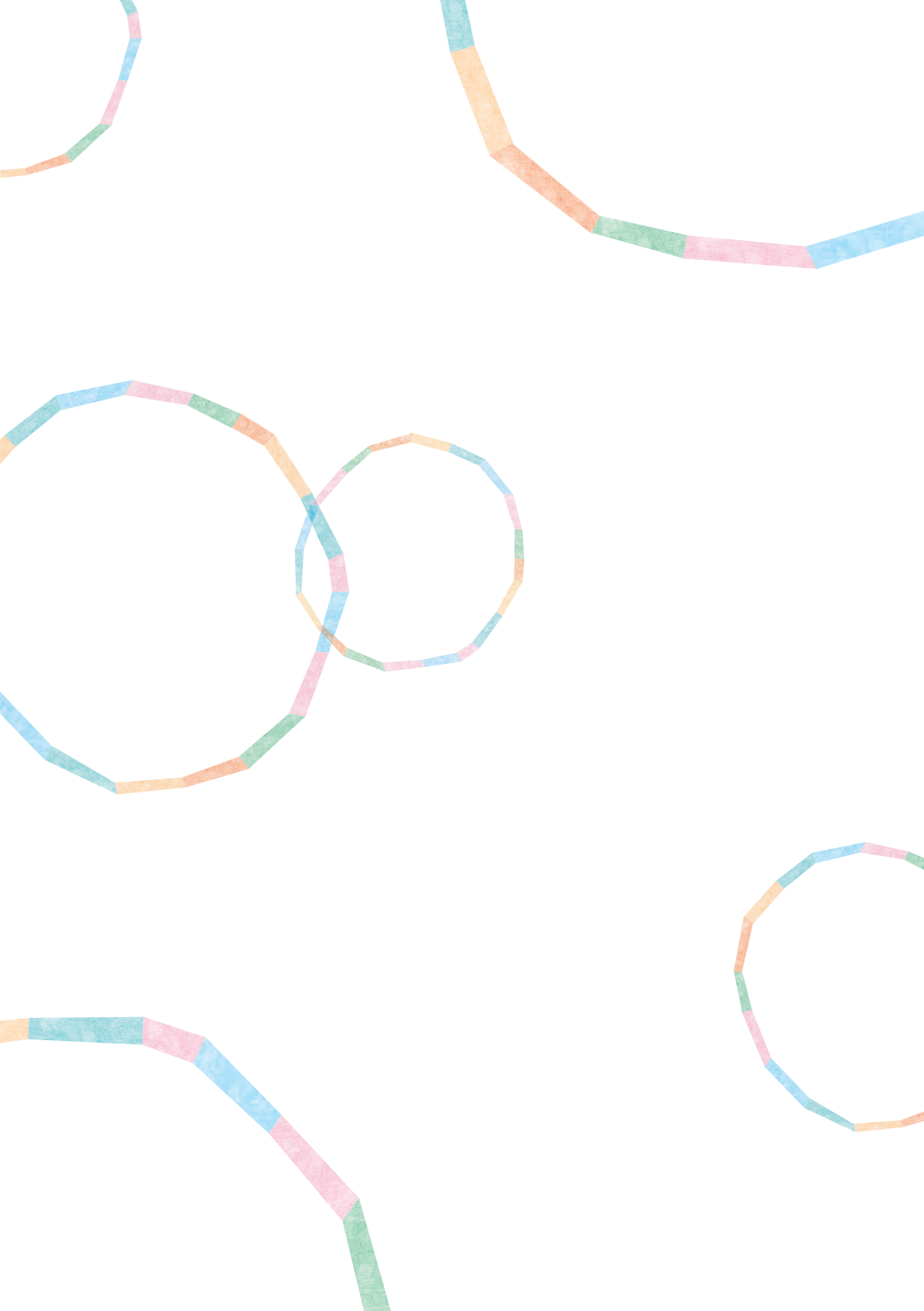


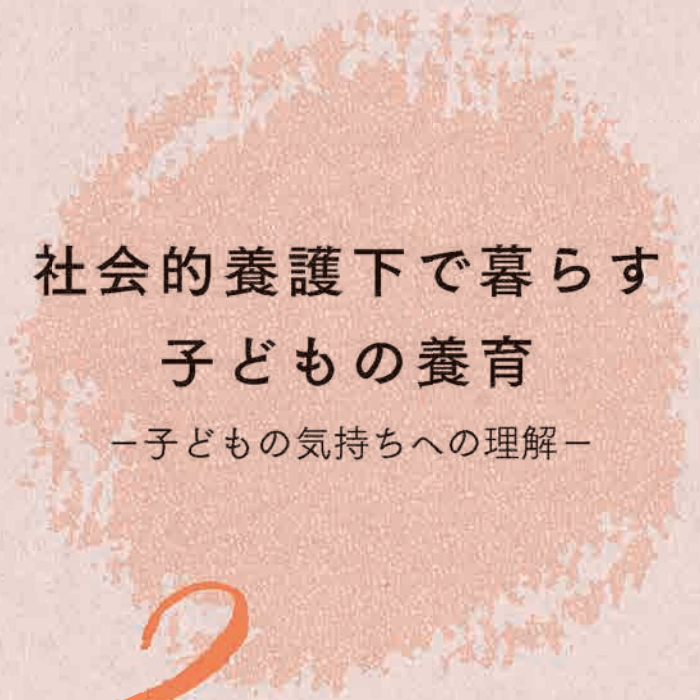
K.H.

和泉短期大学チャプレン、児童福祉学科准教授

和寺悠佳

- 略歴** 東京神学大学大学院博士課程前期課程組織神学専攻修了 修士（神学）
日本基督教団教務教師
- 専門分野** 組織神学、日本キリスト教史
- 担当科目** キリスト教概論、キリスト教倫理、キリスト教社会倫理（専攻科）
- 経歴** 横浜共立学園中学校高等学校教諭、明治学院大学キリスト教研究所客員研究員を経て現職
- 現在** 和泉短期大学チャプレンとして、保育・福祉の土台にあるキリスト教信仰についてお伝えすることが私の務めです。神様に愛されていることを知ることが、誰かを愛することへとつながっていきます。神様に愛されて、自分が受けた愛で誰かを愛する保育者・福祉従事者が、キリストの泉である和泉短期大学から育っていくことを願っています。





社会的養護下で暮らす 子どもの養育

—子どもの気持ちへの理解—



准教授
中安恆太
Kota Nakayasu

1 社会的養護とは何か

社会的養護とは、保護者の死亡や長期入院、虐待等の何かしらの理由によって、家庭での生活が困難になった子どもを、公的な制度で保護・養育するとともに、養育に困難を抱える家庭への支援も行うことである。家庭での生活が困難になった子どもは、乳児院や児童養護施設等の「施設養護」か、一般家庭の中に子ども受け入れる里親や養子縁組等の「家庭養護」において、新たな養育者の元で暮らしが始まる。施設養護では、主に保育士が親代わりとして子ども達の日常的な養育を担う役割がある。

2 複雑な背景を背負う子ども達

社会的養護が必要になる背景について、最も多い理由が虐待であり、児童養護施設で暮らす約65%の子どもは虐待を経験している。虐待が起きる背景は1つの要因ではなく、複数の要因が重層的に絡んでおり、保護者の長期入院、両親の不和、精神疾患、経済的問題等がある。社会的養護下で暮らす子ども達は、住み慣れた地域、友人等と離れる喪失感に加え、不適切な養育を受けてきたことによる愛着障害の他、発達障害等の何かしらの障害を抱えている子も増加傾向にある。そのため、障害の特性の理解、トラウマ等に対する心理的なケア、家族との関係調整等、子ども一人ひとりに応じた

養育が必要となる。

3 子どもの声を聴く

子ども達への養育を考える中で、ベースとなるのが子どもの気持ちを理解することである。不適切な養育を受けてきた子ども達は、自分の気持ちを上手く言語化できない、または大人への不信感から気持ちを伝えることに抵抗感を持つ子ども達もいる。日本が批准している「児童の権利に関する条約」では、子どもの生きる権利の保障等が示されていること以外にも、「自由に意見を表明する権利」や「意見を聴取される機会の保障」が示されている。このような権利を保障するためにも、子どもが安心して話せる場所や人が必要である。子どもは、話したい時に話せる大人が近くにいて、傾聴されることにより、これまで得ることが難しかった納得感や満足感が得られていく。また、養育者側は、子どもがうまく言語化できない気持ちがあることを理解することができる。

4 子どもが本音を語れる環境の用意 -本学のボランティア活動-

社会的養護下で暮らす子どもはマイノリティであるため、子どもの気持ちを社会が理解していくことが難しい実態がある。例えば、里親家庭は一般家庭と同様に地域の中で暮らすため、里子や里親の実子が、学校内において里親家庭で暮ら

す自分の気持ちを話しても、周囲が理解できる環境とは言い難い。

東京都里親会（東京養育家庭の会）の1つの支部では、年に1度里親家庭の子ども達が集まるイベントがある。その中で、中高生はグループに分かれ、今困っていること、悩んでいること等の気持ちを話し合う機会を設けている。また、小学生以下の子どもは、本学の学生がボランティアとして入り、子ども達が行いたい遊びに付き合う。年齢の近い「お姉さん」的な学生との交流によって、子どもの気持ちが解放しやすくなる狙いもある。活動をする中で、中高生は（社会的養護下で暮らす子どもへの支援は、法律上は原則高校卒業までのため）将来への不安等、当事者同士で共有できて良かったという声もあった。小学生は、他の里親家庭の子どもと、里親家庭に来る前の話をして「こんな話は、学校じゃ理解してもらえないよ」という声もあった。このように、当事者同士の交流を行うことも、子どもの気持ちを理解していくために必要な機会である。



本学の学生が遊びを通して関り、子どもが話しやすい環境を用意する

5 社会で支える養育

ここまで、社会的養護について触れてきたが、社会的養護が必要になる前の段階で社会のサポート体制があれば、虐待等を未然に防げた可能性がある。実際、虐待経験のある方からは、周囲にSOSを発信したが適切に対応してもらえなかったという声や、家庭が社会から孤立していたという声がある。虐待は、家庭内という閉鎖的な環境で起きやすいため、保育所や学校の関係者が子どもや保護者の違和感に気づくことや、地域住民も異変に気づいたら児童相談所等の専門機関へ相談することが重要である。専門機関へ連絡することは、虐待を「裁く」ことや「懲らしめる」ことではなく、子どもを中心としたサポート体制を強化していくという認識も社会には必要であろう。

参考文献

こども家庭庁（2023）「社会的養育の推進に向けて（令和5年4月5日）」
厚生労働省（2020）「児童養護施設入所児童等調査の概要（平成30年2月1日現在）」

中安恆太

学歴	東洋大学大学院 福祉社会デザイン研究科福祉社会システム専攻 修士課程修了（社会福祉学） 日本女子大学大学院 人間社会研究科社会福祉学専攻 博士後期課程 単位取得退学
専門領域	子ども家庭福祉／社会的養護／里親・ファミリーホーム
社会的活動	相模原市子どもの権利相談室 救済委員／相模原市社会福祉審議会児童福祉専門分科会 分科会長 など

後になって分かること

ー東日本大震災・原発事故から
12年後のスタディーツアーー



専任講師

吉田久仁子

Kuniko Yoshida

2011年3月11日（金）午後2時46分に皆さんは、どのようなお過ごしでしたか？

私は当時、福島第一原子力発電所から約45.0km南下した福島県いわき市にある私立幼稚園で園長をしていました。それから12年を経て、2023年8月に和泉短期大学の教員として学生と共に被災地を訪れることとなりました。

実は東日本大震災の2日前、3月9日（水）のお昼前にも大きな地震がありました。外出中、車で信号待ちをしている際、車が左右に揺れる程の今まで経験したことがない大きな揺れに遭遇しました。直ぐに携帯電話で幼稚園に電話を入れて、子どもたちと園内の様子を聞き取り、無事であることを確認したのですが、その時点で2日後に未曾有の大災害が発生するとは全く予想もできませんでした。

3月11日、私は1階の職員室で事務作業をしていましたが、ぐらっと揺れを感じた瞬間に2階の保育室へ飛び上がっていききました。いつもでしたら、揺れを感じて震度を推測する余裕がありましたが、あの時は咄嗟に体が反応しました。ただならない異変を感じたのです。2階の保育室には、預かり



日本キリスト教団原町教会での学び



東日本大震災・原子力災害伝承館

保育の園児6名と保育者2名がおりました。保育者1名が落ちてきた絵本で傷を負っていましたが、子どもたちに怪我はありませんでした。

日頃から避難訓練をしていて、非

常時には2階の保育室からは避難用滑り台を使い、子どもたちがそれぞれ滑って園庭中央に集合することになっていましたが、避難用滑り台は全く役に立ちませんでした。余震が続く子どもが一人で立つことは困難で保育者が子どもを包み込むように一人ずつ抱いて、余震の合間を縫って園庭の中央に避難しました。その時ふと走行中である通園バスのことが頭に浮かびました。

急に空が暗くなり雪が降り始めました。その寒さが私に次の行動を促してくれたのです。大きな余震の合間に再び2階の保育室へ子どもたちのコートやリュックサック、靴を取りに行きました。そして、2階のテラスからそれらを園庭に向けて投げ落とし、保育者が園庭で受け取って子どもたちにコートを着せ、靴を履かせて保護者のお迎えを待ちました。その後は職員室から卒園台帳と在園児の入園願書、貴重品の入った手提げ金庫を持ち出し自家用車に入れました。



聖愛ちいろば園の畑で
収穫したきゅうり、美味しい～



聖愛こども園のツリーハウス

走行中の通園バス用の携帯電話にコールしても繋がりません。その時間帯の通園バス経路には2箇所の跨線橋があり不安がよぎりました。地震発生から1時間以内に4名の保護者がお迎えにいらして、子どもたちをお返しすることができました。残る2名の姉妹と保育者は、敷地内の教会牧師館にお預けして、副園長と二人で通園バスを探しに出かけました。バス経路の道路には亀裂、隆起、沈下が起こっていて大渋滞となり通常には走れない状況だったので、2箇所の跨線橋に問題がないことだけを確認めて幼稚園に戻りました。この間、携帯電話は全く繋がらず情報が途絶えていましたが、唯一、当時アメリカに留学していた息子からの電話は繋がり、日本で大地震が起こっていることを聞かされました。

幸いなことに、通園バスも無事に子どもたちを保護者にお返しして、3時間遅れで幼稚園に戻ってきました。残ってい

た2名の姉妹も午後6時半ごろには保護者がお迎えにいらして帰路に着きました。それから約2時間後に東京電力福島第一原子力発電所が津波の被害を受けて危険な状況にあることをニュースで知りました。しかし、まだ危機感もなく翌日も教職員は出勤し、散乱している保育室の片付けと清掃をしていました。また、断水であったため給水所に並んで水を確保してくる職員もありました。そして、いよいよ3月14日午前11時すぎに福島第一原子力発電所3号機で水素爆発が起きました。園舎の片付けをしている最中に、ニュースでその映像を目にして深刻な事態に陥っていることを実感することとなりました。片付けを途中でやめてお互いの無事と再会を祈りあい、それぞれの避難生活に入りました。同時にこの日から、目には見えない放射線との闘いが始まったのです。

その後、保育が再開されていくことになりますが室内活動が殆どでした。しかし、いつまでも子どもたちを室内に閉じ込めておくことは出来ません。子どもたちの放射線被曝量を少しでも減らし、その時々で最良の生活や遊びを提供するため、保護者と共に木の枝の伐採などの除染作業を継続して環境を整えていく日々でした。放射線に対する保護者の感受性は実に様々で



南相馬市 地域の方々と
行政との交流

した。2011年8月、保護者会で10月の運動会開催をどうするか議論している中で、お一人の方が「園長先生、もう十分ですよ。幼稚園の園庭が一番安心です。園庭で運動会やりましょう。」と仰ってくださったのです。この時、3月11日からずっと張りつめていた思いから解放され涙がこぼれ落ちました。

あれからもう12年が経ちました。奇しくも2023年8月は福島第一原子力発電所の処理水放出問題で揺れている時期にスタディーツアーで被災地を訪れることとなりました。双葉町にある東日本大震災・原子力災害伝承館では、福島が経験した原子力災害について学びました。原発から30km圏内にある南相馬市の日本キリスト教団原町教会と聖愛こども園、聖愛ちろば園では3.11以降、途切れることなく保育を継続し、



小名浜港



小名浜港も
ここまで津波がきました

放射線と向き合いながら新しい園庭の環境を作りだした実践報告から学び、地域と行政の方々とも交流することができました。また、いわき市では小名浜へ向かい「いわきの東日本大震災展」からいわき市の震災直後から復興された現在までをパネル展示・映像から学び、隣接する施設でいわきの海産物をいただけてきました。

こうして今、私が保育者養成校の教員として保育者を志す学生と共に在るのは、大災害を通して経験してきたこと、人と人との繋がりの中で生かされ、子どもや保護者、保育者とどのように保育を営んできたのかを語り伝えていくことなのではないかと考えています。



最終日アクアマリンふくしま



児童福祉学科 専任講師

吉田久仁子

学歴 東洋英和女学院大学大学院 人間科学研究科 博士前期課程修了 人間科学修士

専門分野 保育学 幼児教育学

担当科目 キリスト教保育 保育内容「人間関係」 保育内容「環境」など

経歴 元私立幼稚園園長・私立保育園副園長

現在 和泉短期大学 地域連携推進センター
子育て支援プログラム はっぴい・すまいい担当

子どもに寄り添う音楽

—音楽に初めて出逢う我が子との
関わりで気付いたこと—

5

助教
前島麻衣
Mai Maejima

私

は幼い頃から音楽を学び、幼稚園教諭となって、創意工夫しながら子どもとたくさんの音楽を楽しみました。その経験から「保育や支援の中で人の心に寄り添う音楽が果たす役割」について研究を進め、保育・福祉専門職を養成する和泉短期大学で音楽関連科目を担当しています。

本稿では、私が母親として初めて音楽に出逢う我が子との日々で、改めて感じ、考えたこと、今現在も探り探りやってみていることをお伝えしたいと思います。

私には現在3歳になる娘がいます。出産後育児が始まり、すぐに幼稚園児と同じように音楽を通してコミュニケーションを取ろうとしましたが、実は早くも「この子の心に寄り添う音楽・歌は何？」と戸惑いました。

幼稚園の現場では「子どもの毎日に音楽が共にあるように」と、子どもたちの好きな事・興味のある事など、子どもの心を映し出すような音楽・歌を大事に考え歌ってきましたが、娘の中にそれらはまだ無く、本人すらも分からない状態で好きな音楽など分かるはずありません。娘の心に寄り添う音楽は、親である私と娘が共に見つけていくものだとこの時改めて気が付きました。

それからは毎日、あれやこれや色々な歌とリズム・音で娘に話しかけてみましたが、いつでも私が期待したような反応が返ってくるわけではありませんでした。遊んでいて機嫌がよい時には楽しい反応が返ってきて、眠たい時・ぐずっている時には、耳を傾けて泣きやみ聞き入ることもありました

が、そうかと思うとたちまち気分が変わって泣き出し、歌なんかお構いなしの時もたくさんありました。

同じような状況でも同じ歌がいいわけでは無いので、果たしてこの子の好きな歌は何なのか、子どもの心に寄り添えているのか実感できないことが多くあり、歌ったり音を出してみたり、楽しいの？聞いているの？と子どもの顔を見ながら、どう心に届いているのか？私は迷いの中で娘の様子を見ながら、とにかく色々試す毎日でした。

そんなドタバタの毎日でしたが、やがて7カ月頃になると、次第に娘はお座りができるようになり、音楽に合わせてお尻を浮かせるような動きで表現するようになり、はいはい、タッチと運動機能がさらに発達すると、屈伸運動のように足でリズムを取ったりと娘なりの音楽が見られるようになりました。



1歳を過ぎて発語が増えてきたある日、何度も歌っていた私の歌に急に「・・・だ!」と、語尾を合わせて一緒に歌ってきました。私は思わずハッとして、もう一度同じフレーズを歌うと「・・・だ!」と、再び歌詞の最後と一緒に合わせて私の顔を見てにっこりと笑いました。私も微笑み返すと、娘はますます嬉しくなったようで、何度も「・・・だ!・・・だ!」と繰り返しました。声を合わせられて、親と同じように声で音楽を表現し楽しさを表した瞬間でした。娘が私と一緒に歌うことを楽しんでいると実感し、幸せがぐっとこみ上げてきました。

これまで音楽がどのように娘に届いているのか常に模索の中でしたが、この時、ああ、娘はこれまで親の私が気持ちを込めた音楽をずっと耳で聴きながら、体を動かし表現して楽しんでいたのだと嬉しい気持ちになり、音楽は確実に届いている確信に変わりました。同じタイミングで声を合わせることはお互いの気持ちに寄り添う経験、私と娘と一緒に音楽を楽しんでいる共感になったのでした。



娘は2歳半から保育園に通っています。3歳を目前にした今、お花を見つけると手で花の形を作りながら「おはながわらった〜♪」と歌い、歌から聞いた言葉を実体験に繋げて私に伝えてくれます。さらに一緒に見ている私が共に歌うことで、同じものを見て楽しみ、気持ちの共有をしています。

母親としての経験を通して、赤ちゃんにとって「子どもに寄り添う音楽」とは、子どもに良かれと大人が音楽を与えることではなく、まず音楽を感じている幼い子どもに寄り添うことから始まるのだと気づくことが出来ました。「子どもに寄り添う音楽」とは、必ずしも大人が発信する歌ばかりではない、「この歌が子どもに寄り添う音楽だ」と決まったものがある訳もないのでしょうか。乳幼児は「共振」から「共感」に繋がると佐伯（2007）1）は説明していますが、「共に揺れて共に感じる」こと、赤ちゃんと音楽で共に揺れることがその始まりだと気づきました。子どもが発する音やリズムを感じとり、それに応じて一緒に体を揺らしながら、子どもが楽しんでることを一緒に感じてみるのが重要だと実感しています。

子どもを育てる毎日の生活の中で、音楽（歌やリズムカルな音や動き）は身近にあるものです。音楽を介して子どもに寄り添い共に楽しむことをこれからも学生たちと考えていきたいと思っています。

引用・参考文献

- 1 佐伯胖（2007） 共感 -育ち合う保育のなかで- ミネルヴァ書房

児童福祉学科 助教

前島麻衣

学歴 国立音楽大学音楽教育学科器楽学科ピアノ専攻卒業 学士（音楽）

玉川大学大学院教育学学科教育学専攻修士課程修了 修士（教育学）

専門分野 教育学（乳幼児）、音楽（ピアノ）

担当科目 子どもと音楽 保育者論 実習指導等

経歴 学校法人百羊学園 昭島幼稚園教諭13年
和泉短期大学児童福祉学科 助手3年
産休・育休を経て復帰 現職に至る
保育現場で培った「音楽のある子どもの生活」を考え、子どもが自ら楽しむ音楽を学生と共に考え、将来の保育者である学生自身も音楽を楽しめる授業を目指しています。





キャンパスだより



准教授
中野陽子
Yoko Nakano



A



B



C



D



E



F

和泉短期大学 児童福祉学科・専攻科の 学内の様子をお届けします



G



H

A 第59回、第14回入学式が行われました

B 子育てひろば「はっぴい」および「すまいいい」を開催しました

C 1年生が幼稚園保育体験を実施しました

D 1年生がお店屋さんごっこを企画、実施しました

E 学生の主体的な学びを大切にした授業展開を行っています

F 4年ぶりにいずみ祭が行われました

G 保育・教育実習に向けて、事前学習に励んでいます

H 卒業証書授与式が行われました

准教授

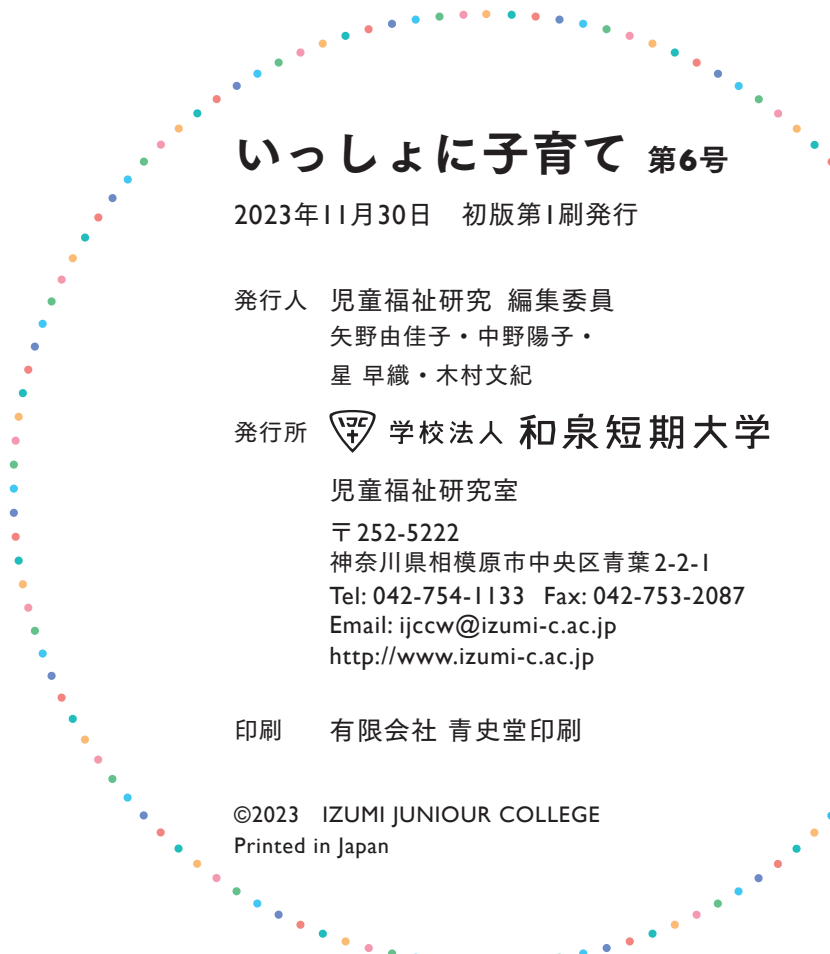
中野陽子

学歴 日本社会事業大学大学院 社会福祉学研究科社会福祉専攻博士前期課程修了（社会福祉学）

専門分野 社会福祉学・障がい者支援

担当科目 特別支援保育Ⅱ、子ども家庭福祉、実習指導、実習、障がい者福祉論他
誰もが共に生きる社会実現の大切さを伝えております。

経歴 障がい者施設 生活支援員7年
和泉短期大学 助教
田園調布学園大学 講師
を経て現職
和泉短期大学の卒業生としてたくさんの後輩を育てていきたいと思っております。



いっしょに子育て 第6号

2023年11月30日 初版第1刷発行

発行人 児童福祉研究 編集委員
矢野由佳子・中野陽子・
星 早織・木村文紀

発行所  学校法人 和泉短期大学

児童福祉研究室

〒252-5222

神奈川県相模原市中央区青葉2-2-1

Tel: 042-754-1133 Fax: 042-753-2087

Email: ijccw@izumi-c.ac.jp

<http://www.izumi-c.ac.jp>

印刷 有限会社 青史堂印刷

©2023 IZUMI JUNIOR COLLEGE

Printed in Japan

表紙絵：荒井万梨永（2018年度卒業生）

花言葉：黄色／ガーベラ「親子の愛」

紫／クレマチス「深い思いやり」

裏表紙絵：林田桂子

